
ある卒業式の風景

出口 常葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある卒業式の風景

【著者名】

NZマーク

NZ8474D

【作者名】

出口 常葉

【あらすじ】

卒業式の片隅で起つていった、ちょっとした奇跡。

卒業式。今日で高校生活も最後となる日。ある者は泣き咽び、ある者は再会の誓いを語り合ひ。アルバムに思い出を書き連ねる者、在りし日の思い出を語る者。そして、姫たる思いを告白するものもまた、卒業のこの日なのであった。

式典を終え、教室に戻った幸人は、机の中に折りたたんだ紙切れが入っていることに気付いた。

取り出し、開いてみる。可愛いペンギンの模様の入った紙切れには、不可解な言葉が書かれていた。

「くりょぺばらぱれのすてそしん」

一見すると意味不明の言葉。もちろん、何を意味しているのか幸人にも分からない。しかし、この文字を読んだとき、幸人の心は打ち震え、その顔には笑みすら浮かんでいた。

「……やはり、来たか」

ぼそりと呟く。隣の席の男子生徒がそのメモを覗きここんで顔をしかめた。

「なんだそりや、何かの悪戯か?」

「ふつ、違うな」

そのメモを人差し指と中指で挟みながら、幸人は不敵に笑つた。

「これは挑戦だ」

「そう。この西高ミステリー研究会会長、綾小路幸人様へのな」

「……そ、そうか」

卒業式のめでたい日にも拘らず、その男子生徒の顔にはやや引き気味の表情が浮かんでいた。

「これは戦い概のありそうな挑戦だ。いいだろ? この綾小路幸人の頭脳に対する最後の挑戦、受け取ろうではないか」

誰にもなく高らかに宣言し、幸人はブレザーを脱いだ。そして、

それを肩にかけ、教室から出て行く。

「おい、もうすぐ先生が来るぞ！！」

男子生徒の声に、幸人は顔だけで振り返った。

「帰つたとでも伝えておけ。この至高の挑戦者に背を向けるなど、我が流儀に反する」

そう言い放ち、幸人は悠然と廊下を歩いていったのだった。

旧校舎の一室。天宮静香は暗闇の中で待っていた。誇り臭い香り

と、古びた木材の感触の中で。

彼はここに辿り着いてくれるだろうか。

いや、きっと辿り着くはず。私の見込んだ人の人ならば。

高鳴る胸を押さえつけ、もうどれほど待つだらう。

卒業式はとっくに終わっているはず。あの人はもうメモを見ただろう。静香の全てをぶつけたあの謎。解けるはずのない謎。ここで待っていても、彼はきっと来ない。そのはずなのに、静香は信じていた。

彼、綾小路幸人はきっとここに来てくれる。

待ち始めてから三十分。突然ガタガタと教室のドアが揺れた。静

香の鼓動は最高に跳ね上がる。

きしんだ音と共に引き戸が開かれ、陽光が差し込む。

その日差しを受け、ゆっくりと教室に入ってきた人影こそ……。

「あ、綾小路先輩」

「やあ、天宮君。君だと思っていたよ」

そう言つて、ブレザーを肩にかけた幸人は静香に向かつて微笑みかけた。

その笑顔だけで、静香の心は天にも昇る気持ちだった。しかし、謎を与えた者として、守るべき最低限のルールがあった。

「な……なぜ、私だと？」

「何、簡単なことだ……」

言いながら、カッター・シャツの胸ポケットからメモを引っ張り出

す。

「このメモ用紙に書かれているペンギン。これは君のお気に入りのキャラクターだ。それに手書きの文字の筆跡は、君のものだね？」

「そ、その通りです」

幸人が自分の筆跡を覚えていた。それは、静香にとつて何にも勝る幸福。今にも抱きつきたい衝動を抑え、静香は次の質問に移った。

「その暗号の謎は……？」

ピクリと幸人の眉が動いた。しかし、一瞬の躊躇の後、幸人はきっぱりと言い放つた。

「わからん」

勝った。静香の心に歓喜の声が上がる。ついに、難攻不落と言われた綾小路幸人に、自分は土をつけることが出来た。そう思つた次の瞬間、幸人の口から発せられる言葉に、静香はその身を硬直させた。

「これは反則だ」

「な……なにを」

「ここに来るまで三十分。過去のどの暗号パターンに照らし合わせても、この暗号は解けなかつた。唯一、エニグマの暗号システムとは酷似していたが、所詮は似ていても過ぎん。つまり、これは君が編み出した暗号式に基づいているのではないか？」

見破られた。たかが三十分でそこまで調べ上げたというのか。それは通常ではありえないことだった。しかし、相手はあの綾小路幸人である。膨大な量の知識と、それに基づいた絶対的な推理。その力で彼は幾多の挑戦者を退けてきた。静香もまた、その幾多のうちの一人である。

言葉を失う静香の前で、幸人はただ朗々と語り続ける。

「作者は、読者に謎を解く機会を与えねばならない。即ち、作者のみが解き方を知りえる状況を作つてはならない。そのルールに基づいていないこのやり方は明らかに反則だ。これは完全犯罪を仕掛けたゲームではないのだよ天宮君。最も、作者が君であることを見抜

けば、あるいは一昼夜もあれば看破出来るやも知れぬが。これは恐らくだが、一時期、君が没頭していたペギミニン五二三式を用いたのではないかな？」

不遜とまでいえる幸人の態度に、静香はただ心酔していた。
「完璧です。綾小路先輩の勝ちです。そう、これは解き得ぬ謎。仰るとおりペギミニン五二三式が完成したのです。まだ私以外の誰も解けぬ、絶対的な謎です。私はルールを侵してなお、あなたに勝ちたかった。けれども、反則であることを看破された今、私の絶対的な敗北です」

静香はそう言って、静かに頭を下げた。

「うむ、その潔さや良し。そして、あくまでこの私に勝とうと言つ不屈の精神もまた天晴れだ。何より、この最後の戦いに、新しい暗号を編み出したその執念。これはもう見事の一言に尽きるぞ」

「しかし、私は……」

「構わん。君の作戦は九分九厘まで成功していた。最後の詰めを誤つた事については遺憾と言うの他はないが、それでもなお、この戦いにおける君の意氣込みは評価に値する」

そこまで言つて、それから幸人はひとつ悪戯っぽい笑いを浮かべて見せた。

「よつて、君に敢闘賞を与えるよ。それと、明日からは君がミス研の新たなる部長だ。これについては、後ほど声明文をもつて承認の印としよう。明日までには一筆認め、君の下へと届けることを約束する」

「あ、ありがとうございます」

静香の両眼からとめどなく溢れる涙。その柔らかなウェーブのかかつた髪を優しく撫で付ける幸人。

「君が新たなるミス研を作りたまえ」

幸人の言葉を聞き、静香はその胸で静香に涙を流し続けた。

そしてしばしのときが流れた。

「一つだけ、教えてください」

泣きやんだ静香は、幸人の胸にも垂れたまま、高い位置にある雪との顔を見上げて尋ねた。

「なんだ」

「暗号が解けなかつたのなら、どうしてここく？」

「そんなことか……。それは、あるいは君の方が良く分かっているんじゃないのかね？」

そう言つて静香を見下ろすように視線を向ける幸人。

「綾小路先輩の口から、聴きたいのです」

少し拗ねたように静香はそう言つた。それを愛おしそうに眺めていた幸人は、静香の見つめる中でゆっくりと口を開いた。

「こゝは、君と私の思い出の場所だらう。あの黄昏の記述士との対決は君の協力無くして勝ち得なかつただらう」

そう、次々と記述問題を繰り出す黄昏の記述士との対決は、ミス研の長い歴史の中でも最も恐ろしい戦いの一つだつたといえるだろう。その対決の最後を締め括つた場所こそ、今一人の居る旧校舎の一室だつた。

「ああ、やはり覚えていてくださつたのですね」

「もちろんとも。忘れるものか」

「嬉しい……。お慕い申し上げております。先輩……いえ、幸人様」

そつと、再び幸人の胸に頬を寄せる静香。幸人はその静香をゆっくりと抱きしめた。

「いいだらう。ついて来るがいい。私は君を守る盾となり、共に歩くことを誓おう」

「……はい」

そして見つめあう二人。

その唇がゆっくりと近づき……。

『三年四組、綾小路！――今すぐ進路指導室に来いつ――最後まで手間かけさせやがって、こゝの馬鹿野郎！――』

校内放送が響き渡る。どうやら旧校舎のスピーカーは生きている

ようだ。乱暴な物言いは女性の声だった。幸人の担任であり、教師の中でもトップクラスの荒くれ者、陣内京香に他ならない。

「やれやれ、無粋なことだ」

「ふふ、けど行かなければいけないのでしょう?」

「ああ、我ら四組を率いてくれた恩師だからな。一つ行つてやるとしよう」

「校門の前で、お待ちしております」

「少し、かかるかもしれんぞ」

軽いため息交じりの幸人の言葉に、静香はそっと笑った。

「構いませんわ。また、新しい謎でも考えてありますから」

「うむ、あくまでも挑戦者であり続ける態度、私の見込んだとおりだ。よからう、それでは極力ゆっくり行くとしよう。極上の謎を用意しておいてくれたまえ」

「はい、お任せを」

見つめあい、そして微笑を交し合ひ。静香の心臓は、いつの間にか高鳴りを止め、幸人の傍にいることが自然なのだと思つようになつていた。

「よし、それでは行こうか? レディ」

幸人がそつと手を差し出せば、静香はその手に自然と自らの手を重ねる。その手を伝つように、幸人の腕に自らの腕を絡めた。

「参りましょう」

そして二人は教室の外へと、ゆっくり歩いて出て行つた。

その後、二人は共に歩み続け、幾多の事件とめぐり合ひのだが、それはまた別の話である……。

(後書き)

特に言いたいことはあつません。
ご意見などありましたら、頂けるとともに嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8474d/>

ある卒業式の風景

2010年10月8日15時29分発行